

希望表現における対象NPの格標示に関する覚書

Remarks on the case marking of the objective NP In Japanese desiderative expressions

菅井三実* 成瀬厚司**
SUGAI Kazumi NARUSE Atsushi

The present paper is devoted to analyzing the *ga/wo* (nominative/accusative) alternation of the objective NP in Japanese desiderative expressions (dative construction) to show that the objective NP is more likely to be marked with the *-wo* (accusative) case than with the *-ga* (nominative) case when the dative-marked (*ni*-marked) NP occurs in the same clause with the objective NP. Section 1 and 2 review previous studies to discern between factors that promote the *ga*-marking and ones that prohibit the *ga*-marking. Taking it for granted that no single one of these factors is exclusively crucial to explain the case-alternative phenomenon, in the third section we propose that another factor may work for the alternation, that is, the objective NP in desiderative expressions is marked with the *-wo* case than with the *-ga* case when the dative-marked NP occurs in the same clause. In support of the hypothesis proposed in Section 3, the fourth section examines how the *ga*-marking on the objective NP is suffocated when the dative-marked NP co-occurs, to show that the hypothesis is valid in the distributional terms.

キーワード：主格，対格，希望構文，格交替，日本語

Key words : nominative, accusative, desiderative expressions, case-alternation, Japanese

0. はじめに

本稿の目的は、希望表現における対象NPの主格(ガ格)と対格(ヲ格)の格交替現象を考察対象とし、従来の研究で指摘されていた要因のほかに、同一の節内に与格NPが生起するとき主格(ガ格)での標示が阻害される傾向を例証することにある。本稿でいう希望表現は、例えば「水が飲みたい」や「事実を知りたい」のように動詞に助動詞「たい」が膠着したものを指すが、必要に応じて可能構文にも言及する。

本稿の構成は次の通りである。第1節では、先行研究で指摘されていた交替要因のうち、主格(ガ格)標示を促進する要因を整理し、第2節では主格(ガ格)標示を阻害する要因を整理する。その上で、第3節において、格交替に対する共起成分の影響について仮説を提示し、第4節で数量的な観点から妥当性を検討する。

1. 格交替の促進要因

本稿で取り上げる現象は、次の(1)が示すように、述語が希望を表す文において、希望の対象NPが主格(ガ格)と対格(ヲ格)で交替するものである。

- (1) a. ウナギを食_{たい}。
b. ウナギが食_{たい}。

(1b)の主格(ガ格)成分は、かつて時枝誠記(1950)が「対象語格」と呼び、久野(1973)が「目的格のガ」と呼んだものであり、その名称が示唆するように、主語というより目的語に近く、そうであるからこそ対格(ヲ格)と交替するものと記述される。(1)のように希望を表す文のうち、特に述語に「たい」を含むものは「タイ構文」と呼ばれるが、本稿の考察対象は、事実上、この「タイ構文」に限定する。同様の現象は、「英語を話せる/英語が話せる」のような可能構文にも認められるが、タイ構文に関する本稿の論旨と可能構文の関係については、第3節で触れる程度にとどめたい。

さて、この交替現象は、多くの先行研究で取り上げられてきたが、希望構文における「ガ/ヲ」の分布について、庵(1995a, 1995b)は、基本的に全ての場合において対格(ヲ格)が可能であることを前提に、ある条件の下で対格(ヲ格)から主格(ガ格)に交替することが可能になるという結論を導いている。この庵(1995a, 1995b)の結論を踏まえれば、問題は「どのような場合に主格(ガ格)での標示が可能になるか」という条件の認定が焦点になる。そこで、先行研究を整理する意味で、主格(ガ格)での標示が促進する要因を列挙しておきたい。希望構文において対象NPの主格(ガ格)標示を促進する要因は、次のように整理される。

*兵庫教育大学(社会・言語教育学系)

**兵庫教育大学大学院

平成18年4月21日受理

- 【ア】対象NPが主体に接近する方向に移動する場合は主格(ガ格)をとりやすいが、対象NPが主体から離れる方向に移動する場合には主格(ガ格)をとりにくい。
- 【イ】対象のカテゴリーが想定可能な動詞の方が主格(ガ格)をとりやすい。
- 【ウ】対象NPが容易に動きやすいものほど主格(ガ格)をとりやすい。
- 【エ】対象NPが叙述の焦点となるとき主格(ガ格)をとりやすい。

もちろん、これら4つの条件が対等に効力を持つわけではなく、この順に効力が強いというわけでもない。

【ア】と【イ】は動詞に関するもので、【ウ】と【エ】は名詞(句)に関するものであり、議論の都合上、この順にコメントしていきたい。

まず、【ア】の条件は、大江(1973)が指摘したもので、次のような観察に基づいている。

- (2) a. 中古パソコンを買いたい。
b. 中古パソコンが買いたい。
- (3) a. 中古パソコンを売りたい。
b. ? 中古パソコンが売りたい。

(2)と(3)を比べると、「買う」と「売る」という動詞のペアで最も顕著な意味的差異は方向性であり、(2)のように動詞「買う」で表される行為において、対象NP「中古のパソコン」は主体NP「私」の方向に移動することになるのに対し、(3)のように動詞「売る」で表される行為においては、「中古のパソコン」は主体NPの「私」から離れて行くという方向性をもつ。このとき、(2)のように対象NPが主体NP「私」の方向に移動するときは、(3)のように主体NPの「私」から離れるときと異なり、主格(ガ格)での標示が可能になる。これが、【ア】の条件である。ただし、主体NPへの移動が含まれれば常に対象NPの主格(ガ格)標示が可能になるというわけではないので、その意味で、「促進条件」と性格づけたのが本稿の見解である。

2つ目の【イ】は、生田(1996)で提唱され、内容的には、対象のカテゴリーが想定可能な動詞の方が主格(ガ格)をとりやすいというものである。ここでいう「想定可能」という規定が具体的にどういうことか明確にされていないけれども、およそ「どのようなものが対象になるか、その範囲を限定できること」と考えていいようである。

- (4) a. 本を読みたい。

- b. 本が読みたい。

- (5) a. 家を建てたい。
b. 家が建てたい。

このように、述語動詞が「読む」や「建てる」のとき、対象NPに来るものは(ある程度)限定され、特に、それぞれ「本」や「家」を想定することは容易であり、その場合には、主格(ガ格)での標示が容認されやすいというのが生田(1996)の分析である。このことは、次のような例と対照的であるという。

- (6) a. 生徒全員の名前を覚えたい。
b. ? 生徒全員の名前が覚えたい。
- (7) a. ハエを殺したい。
b. ? ハエが殺したい。

つまり、(6)のように、動詞「覚える」に対して、どのような対象をとるか限定することが難しいときは主格(ガ格)で標示されにくく、あるいは、(7)の動詞「殺す」のように、対象に「人」をとることが想定しやすいにもかかわらず、それと異なるものを対象にとるときも主格(ガ格)で標示されにくいということになる。

3つ目の【ウ】は、対象NPの名詞としての語彙的性質に関して山本・武藤(1996)が指摘したものである。具体的には、次のような例において、対象NPの主格(ガ格)標示を「許容しない」割合をアンケート調査している。

- (8) a. 英和辞典が買いたい。 [容認不可は31%]
b. 家が買いたい。 [容認不可は47%]

山本・武藤(1996)のアンケート調査において、(8a)の非容認度が31%であったのに対し、(8b)の非容認度は47%であったという。対象NPの主格(ガ格)標示を「許容しない」割合は、これが低いほど主格(ガ格)標示が容認されやすいということであるから、(8)のペアから、「英和辞典」のように移動しやすいものの方が、「家」のように移動しにくいものよりも主格(ガ格)で標示されやすいというのが【ウ】の要因である。

最後の【エ】は、森田(1988)や山内(1997)で指摘されているように、叙述の焦点となるとき主格(ガ格)をとりやすいというもので、次のように例示される。

- (9) a. ビールではなく、発泡酒を飲みたい。
b. ビールではなく、発泡酒が飲みたい。

この文脈のように、範列的に「発泡酒」が焦点になると

き、(9a)のような対格(ヲ格)標示よりも、むしろ(9b)のような主格(ガ格)標示の方が自然に感じられる。

以上、本節では、希望構文において対象NPの主格(ガ格)標示を促進する要因を整理したが、これとは逆に、対象NPの主格(ガ格)標示が不可能になるような要因もある。この点について次節で取り上げたい。

2. 格交替の阻害要因

前節では、希望表現において対象NPの主格(ガ格)標示を促進する要因を整理したが、この第2節では、主格(ガ格)標示を阻害する要因をレビューしたい。対象NPの主格(ガ格)標示を阻止する要因は、次のように整理できる。

- 【オ】 漢語の述語動詞は、和語より主格(ガ格)をとりにくい。
- 【カ】 述語が複合的になると主格(ガ格)をとりにくい。
- 【キ】 他動性が高いと主格(ガ格)をとりにくい。
- 【ク】 対象NPと述語の間に他の要素が介在すると主格(ガ格)をとりにくい。

このうち、【オ】と【カ】は動詞の語彙的あるいは形態的な特徴であり、【キ】は述語レベルから構文レベルにかかわる要因といい、【ク】は文レベルの要因であり、【オ】【カ】【キ】【ク】の順に文法単位が大きくなるように並べたので、以下では、この順にコメントを加えていきたい。

まず、最初の【オ】の条件は、動詞の語種に関するもので、田村(1969)や久野(1973)でも指摘されているように、和語の場合に比して、漢語の場合は主格(ガ格)標示が容認されなくなるというものである。次の例を第1節の(2)と比較されたい。

- (10) a. 中古パソコンを購入したい。
- b. ? 中古パソコンが購入したい。

第1節で挙げた(2)の例文と比べると、(2)のように動詞が「買う」という和語であったときには主格(ガ格)での標示に容認度の問題がなかったのに対し、(10)のように「購入する」という漢語になると主格(ガ格)で標示した(10b)の容認度が低下する。^[1]

2番目の【カ】は、述語の形態的構造が単純なものの方が複合的なものより主格(ガ格)をとりやすいというもので、柴谷(1978:266)において指摘されている。具体的には、次のようなペアによって例示できる。

- (11) a. 童話を読みたい。
- b. 童話が読みたい。

- (12) a. 童話を読んでやりたい。
- b. ? 童話が読んでやりたい。

(11)のように述語が単純な「読む」の場合には対格(ヲ格)標示と主格(ガ格)標示の両方が可能であるのに対し、(12)のように複合的な「読んでやる」になると、(12a)のような対格(ヲ格)標示だけが可能で、(12b)のような主格(ガ格)標示は容認されなくなる。

これに関連して、井上(1976)は、受身文や使役文でも対象NPが主格(ガ格)で標示されにくいことを指摘しており、次のように例示される。

- (13) a. 人に自分の仕事を褒められたい。
- b. ? 人に自分の仕事が褒められたい。
- (14) a. ジョンに日本語を話させたい。
- b. ? ジョンに日本語が話させたい。

受身文も使役文も、述語に、それぞれ助動詞の「(ら)れる」や「(さ)せる」を含む点で複合的であり、【カ】の条件に包含されるものと扱っていいだろう。^[2]

3つ目の【キ】は、庵(1995a, 1995b)が言うように、述語の他動性が高いほど対格(ヲ格)で標示される傾向が強く、他動性の低いものほど主格(ガ格)で標示される傾向が強いというものである。「他動性」というのは、よく知られた概念であるが、平明に言ってしまうと、「対象に対する影響(働きかけ)の度合い」を示す概念で、その(影響の)度合いが強いほど「他動性が高い」と規定される。この考えから、次の2組のペアにおける主格(ガ格)標示の容認度の差異が説明される。

- (15) a. その古い花瓶を見たい。
- b. その古い花瓶が見たい。
- (16) a. その古い花瓶を壊したい。
- b. ?? その古い花瓶が壊したい。

(15)と(16)の間で、対象NPの「古い花瓶」に対する影響の度合いを比べると、(15)のように「見る」という行為であれば「花瓶」に何ら変化が生じることはないのに対し、(16)のように「壊す」という行為では「花瓶」の形状ないし機能に一定の変化が生じることから、「見る」よりも「壊す」の方が他動性が高いというのが他動性の考え方である。このとき、(15)では対象NPを主格(ガ格)で標示できるのに対し、(16)では対象NPの主格(ガ格)標示は容認されないことから、他動性の低い述語であれば対象NPの主格(ガ格)標示が容認されやすく、他動性の高い述語ほど対象NPの主格(ガ格)標示は容認

されなくなるというのが【キ】の要因である。^[3]

さらに、他動性という概念は、動詞の語彙レベルで規定される場合に加え、構文レベルで規定される場合がある。構文レベルで提案されている他動性の基準に、Hopper and Thompson(1980)があり、次のような10の条件が挙げられている。^[4]

	高い ←→ 低い
①参加者	2つ以上 1つ
②動作様態	動作 被動作
③アスペクト	動作限界あり 動作限界なし
④瞬間性	瞬間 非瞬間
⑤意図性	意図的 非意図的
⑥肯定	肯定 否定
⑦モード	現実 非現実
⑧動作能力	高い 低い
⑨対象への影響	全体的に影響 部分的に影響
⑩対象の個別化	高い 低い

この10の条件による他動性は、格体系、アスペクト、動詞の活用など文法現象の様々な側面に反映されることが知られている。本稿で分析している格交替現象に関して言うと、例えば、条件節は、⑦の「モード」という条件を満たしていない分だけ、他動性が低くなる。

- (17) a. 中古パソコンを売りたければ、ネットオークションがお勧めだ。
 b. 中古パソコンが売りたければ、ネットオークションがお勧めだ。

前述の(3)の例と比べると、(3b)の容認度が低かったのに対して、(17b)は対象が主格(ガ格)で標示されているにもかかわらず、容認度は下がっていない。このことは、構文として「～ければ」という条件節の形をとることで、モードにおける<非現実>の値を持つことになり、他動性が低い分、主格(ガ格)標示の容認度が高くなるということになる。

ただし、①から⑩の全ての条件が等しく格交替に影響を及ぼすかどうかは慎重に考える必要がある。実際、⑩でいう「対象の個別化」について、庵(1995a, 1995b)は、対象NPの格標示に差異が出ると主張している。

- (18) a. むしゃくしゃして、誰かを殴りたかった。
 b. むしゃくしゃして、誰かが殴りたかった。
 (19) a. むしゃくしゃして、太郎を殴りたかった。
 b. ? むしゃくしゃして、太郎が殴りたかった。

つまり、(18)のように対象NPが不特定の「誰か」の場合は、対格(ヲ格)標示も主格(ガ格)標示も可能であるが、(19)のように個別性の高い「太郎」になると、主格(ガ格)標示の容認度が低下するというのが庵(1995a, 1995b)の分析であった。ところが、この分析が正しいのであれば、次のようなペアにも容認度の差異が生じるはずであろう。

- (20) a. 面白い映画を撮りたい。
 b. 面白い映画が撮りたい。
 (21) a. 黒澤明監督の『七人の侍』を数倍面白くした大作映画を撮りたい。
 b. 黒澤明監督の『七人の侍』を数倍面白くした大作映画が撮りたい。

この2組のペアにおいて、(20)における対象NPの「面白い映画」に比して、(21)の対象NPは、より個別性も具体性も高い。したがって、(21b)のような主格(ガ格)標示は容認度が下がることが予想されるところであるが、実際には、(21b)は十分に容認可能であり、むしろ、(21a)より容認度が高いように思われる。少なくとも、(21b)の容認度に問題が生じるということではなく、この点で、Hopper and Thompson(1980)の挙げた構文レベルの他動性の中でも⑩の「対象の個別化」が格交替に影響を及ぼしているかどうかは疑わしい。結局、述語レベルの他動性と異なり、構文レベルの他動性については、一概に、他動性が高いほど対格(ヲ格)標示が促進され、主格(ガ格)標示が阻害されるというわけではないようである。

最後の【ク】は、田村(1969)や柴谷(1978)にも指摘があるように、対象NPと述語の間に他の要素が介在すると、主格(ガ格)標示の容認度が低下するというものである。このことは、次のように例示される。

- (22) a. 本人と話がしたかった。
 b. ? 本人と話がゆっくりしたかった。
 c. ?? 本人と話が自宅でゆっくりしたかった。

このように、対象NPと動詞の間に副詞的な成分が介在することで文全体の容認度が下がるという現象は、実は、対格(ヲ格)にも言えることであるが、対格(ヲ格)の場合は、容認度の低下は決して著しくはなく、その点で、対象NPの主格(ガ格)に固有の要因と言っていると思われる。

結局、山内(1997)が明確に述べているように、少なくとも希望表現において「ガとヲの選択に関しては、単一の絶対的なルールが存在し、そのルールに従えばあらゆるケースが説明できる」というようなことはなく、様々な

要因が絡み合っていて、ガとヲのいずれが選ばれるかが決定されている」という指摘が妥当のように思われる。こうした事情には、もう1つ事情を複雑にしている要因があるようなので、この点について次節で検討したい。

3. 格成分の共起の影響

前節では、対象NPの主格(ガ格)標示を阻害する要因を先行研究から整理したが、第3節では、対象NPの主格(ガ格)標示を阻害する別の要因を指摘し、その効力について検討を加えたい。

本稿で指摘する要因というのは、以下のような観察に基づくものである。

- (23) a. 文句を言いたい。
b. 文句が言いたい。

この例では、第2節で挙げた主格(ガ格)標示の阻害要因が対象NPにも述語にも作用しておらず、格交替が成立している。ところが、次の(24)のように、付加的に与格成分が共起すると、対象NPも述語も何ら(23)と変わりがないにもかかわらず、微妙ながら、容認度に差異が認められる。

- (24) a. 会社に文句を言いたい。
b. ? 会社に文句が言いたい。

この(24)が(23)と異なるのは、付加的に与格成分「会社に」が共起しているという点だけであり、ほかに差異はない。このとき、(24b)の容認度が低下するというのが本稿における文法性(grammaticality)の判定(judgment)であり、この判定に誤りがなければ、(24b)の容認不可能性は、必然的に、与格成分の共起に帰着される。つまり、この2組のペアで起こっているのは、(23)のように与格(ニ格)成分の共起がない場合に比べ、(24)のように同一の節の中に与格(ニ格)成分が共起すると、対象NPの主格(ガ格)標示が阻害されるということであり、これが新しく本稿が提示する仮説である。

この仮説が示す傾向は、次のようなケースにも認められる。

- (25) a. 中古パソコンを売りたい。
b. ? 中古パソコンが売りたい。

(25)は第1節の(3)と同一であり、【ア】で述べたように、「売る」という動詞が対象NPが主体から離れる方向に移動することを表すことから、対象NPは主格(ガ格)で標示されにくく、この段階で、すでに(25b)のような主格(ガ格)は容認度が下がる。ここで注目すべきは、次の

(26)に示すように、付加的に与格成分が共起すると、主格(ガ格)による標示の容認度が、さらに低下するという点である。

- (26) a. 友人に中古パソコンを売りたい。
b. ?? 友人に中古パソコンが売りたい。

このとき、(26b)の容認度の低さは、(25b)よりも著しいというのが本稿の分析であり、この分析が正しければ、与格成分が共起したことによって、(26b)の容認度が(25b)よりも相対的に低下するということになる。

要するに、(23)のように、与格の共起がなければ容認可能であったものが(24)のように与格の共起によって容認不可能になったり、(25)のように、与格が共起しない段階で容認度が低い文においても、(26)のように与格が共起すると容認度は更に低下したりするといったバリエーションはあるものの、「同一の節の中に与格が共起すると、対象NPの主格(ガ格)標示は相対的に容認度が下がる」というのが本稿の仮説である。

このように、与格成分が明示的に実現する動詞で主格(ガ格)標示の容認度が低下することの延長線上に、経験的に与格成分が多く共起する動詞にあっては、明示的に与格成分が実現しない場合でも、主格(ガ格)標示の容認度が低下するという傾向が観察される。このことは、次のような例によって確認される。

- (27) a. 現在の状況を見たい。
b. 現在の状況が見たい。
(28) a. 現在の状況を話したい。
b. (?)現在の状況が話したい。
(29) a. 現在の状況を伝えたい。
b. ? 現在の状況が伝えたい。
(30) a. 現在の状況を教えたい。
b. ?? 現在の状況が教えたい。

このように、対象NPを定数として「現在の状況」という名詞に固定し、述語だけを変数として(27)~(30)のような4組のペアを作るとき、それぞれの(b)の文は、(27b)、(28b)、(29b)、(30b)の順に容認度が下がっていくことが分かるであろう。(27b)~(30b)に見られる容認度の差異は、必然的に、述語の性質に帰着されるが、(27)~(30)の述語は、他動性に違いがあるわけではない。このとき“与格成分の共起のしやすさ”という観点から見ると、4つの述語のうち、(27)の「見る」は最も与格成分の共起が想定しにくく、(30)の「教える」は与格成

分が共起しやすいという語彙的な性質があり、(28)の「話す」と(29)の「伝える」は、その中間に位置づけられる。実際、動詞「見る」は、与格成分と共起することは稀であり、動詞「話す」や「伝える」は、相手(伝達先)としての与格成分が想定されないまま用いられることがあり得るのに対し、動詞「教える」は相手(伝達先)を想定することなしには成立しにくい。厳密に言えば、もちろん、動詞「伝える」も、相手(伝達先)を想定しないで用いることは不自然であろうが、相対的に見れば、動詞「教える」よりは、相手(伝達先)の想定は強くなく、そうした相対的な関係が、(27b)～(30b)における容認度の差異に反映されているというのが本稿の分析である。要するに、「与格成分が経験的に共起しやすい動詞ほど、明示的に与格成分が実現されていなくても、対象NPを主格(ガ格)で標示することが難しい」という傾向が認められ、その前提として、前節で提示した仮説が作用しているというのが本稿の論旨である。^[5]

ここまで本節で述べたことの趣旨は、希望構文において「与格成分が共起するとき、対象NPは主格(ガ格)での標示が抑制され、対格(ヲ格)での標示が優勢になる」というものであった。ところで、本稿で議論している希望表現(タイ構文)と比較検討される構文に可能構文(能力文や知覚文を含む)があり、次の例が示すように、可能構文も、希望表現(タイ構文)と同様、主格(ガ格)と対格(ヲ格)の間で交替が起こる。

- (31) a. 山田先生は英語を話せる。
b. 山田先生は英語が話せる。
- (32) a. 最終的には目的を達成できた。
b. 最終的には目的が達成できた。

実は、交替現象に関して可能構文と希望表現には大きな差異があり、希望表現では対象NPが対格(ヲ格)で標示されるというのが基本であるのに対し、可能構文では、対象NPを主格(ガ格)で標示するケースが希望構文より多いという事情がある。このことに関連で明確にしておかなければならないのは、格交替に関して本稿で主張する<形式的要因>は、希望表現(タイ構文)にのみ有効であって、可能構文には当てはまらないという点である。むしろ、可能構文においては、本稿でいう<形式的要因>とは全く逆の現象を示すので、この点は記して強調しておかなければならないであろう。すなわち、可能構文においては、与格成分が共起するとき、対象NPに対して主格(ガ格)での標示が抑制されるということはない。

- (33) a. あなたにも一戸建てが持てます。
b. 今の首相に政治改革ができるのですか。

- c. 私にも聴衆の喝采がはっきり聞こえました。

このように、主体NPが与格(ニ格)で標示された可能構文では、むしろ<一ニ一>という格パターンが安定したものとして文法化されており、この点で、希望構文と大きく異なることを確認しておきたい。

以上、第3節では、希望構文においては、与格成分が共起することで対象NPに対する主格(ガ格)での標示が抑制される傾向があるのに対し、可能構文では、むしろ与格成分と(対象NPに対する)主格成分は相性が良いという対照的な関係を確認した。

4. 数量的検討

第4節では、前節で提示した仮説について、与格成分が共起したとき主格(ガ格)による標示の頻度が下がることを数量的に示すことで、仮説の妥当性を補強する。

方法としては、対象NPと動詞を固定し、対象NPが主格(ガ格)で標示される用例と対格(ヲ格)で標示される用例の比を算出し、与格成分が共起する場合と共起しない場合とで、その比率の変化を調べた。もう少し具体的に言うと、用例をカウントするのにインターネットのサーチエンジンGoogleを利用し、類似したページを精査するため、ヒット項目は画面上ですべてチェックした。この調査でカウントすべき項目は4つあり、仮にA, B, C, Dと呼ぶとすれば、次のような関係になる。

		対象NPの標示	
		ガ格	ヲ格
与格成分	なし	A	C
	実現	B	D

[表1]

この表に配置した4つの変数のうち、Aは<対象NPが主格(ガ格)で標示された用例のうち、与格成分が実現していないグループ>であり、Bは<対象NPが主格(ガ格)で標示された用例のうち、与格成分が実現しているグループ>を指す。また、Cは<対象NPが対格(ヲ格)で標示された用例のうち、与格成分が実現していないグループ>であり、Dは<対象NPが対格(ヲ格)で標示された用例のうち、与格成分が実現しているグループ>を指す。こうした分類を念頭に具体的な事例研究を行い、その結果を[表1]に基づいて整理することとしたい。

最初の事例研究として、「名前が/をつけたい」を取り上げ、この場合の格交替を調査した。はじめに、対象NPが主格(ガ格)で標示された「名前がつけたい」を検索し、ヒットした用例の中から、与格成分が共起しない

もの(A)と、与格成分が共起するもの(B)をカウントする。その結果は、A=70, B=17であった。この作業と並行して、対象NPが対格(ヲ格)で標示された「名前をつけたい」を検索し、ヒットした用例の中から、与格成分が共起しないもの(C)と、与格成分が共起するもの(D)をカウントする。その結果は、C=524, D=283であった。これらの用例数を[表1]のフォーマットに整理したのが次の[表2]である。

		対象NPの標示	
		ガ格	ヲ格
与格成分	なし	70例	524例
	実現	17例	283例

[表2]

[表2]の数値をもとに、与格成分が実現していないときと実現しているときとに分けて、対象NPが主格(ガ格)で標示された割合を求めることにする。与格成分が実現していないときに対象NPが主格(ガ格)で標示された割合は、 $【A \div (A+C) \times 100】$ という式によって計算されるので、これによって、11.8%という値を得た。一方、与格成分が実現しているときの主格(ガ格)の割合は、 $【B \div (B+D) \times 100】$ の式で計算され、その値は5.7%であった。この結果から、同じ節に与格成分が実現すると、主格(ガ格)標示の割合は11.8%から5.7%に下がった。^[6]

これと同じ要領で、「メールが/を送りたい」と「意見を/が聞きたい」について調査を行ったところ、それぞれ、[表3]と[表4]のような結果であった。

		対象NPの標示	
		ガ格	ヲ格
与格成分	なし	113例	476例
	実現	52例	317例

[表3]

		対象NPの標示	
		ガ格	ヲ格
与格成分	なし	833例	886例
	実現	6例	53例

[表4]

[表3]から、対象NPが主格(ガ格)で標示された割合を、

先の計算式で求めると、与格成分が共起していないときの主格(ガ格)標示が19.2%で、与格成分が共起しているときの主格(ガ格)標示が14.1%であった。このケースでも、与格成分が実現することで、主格(ガ格)標示の割合は低下した。また、[表4]から、対象NPが主格(ガ格)で標示された割合を求めると、与格成分が実現していないときの主格(ガ格)標示が48.5%で、与格成分が実現するときの主格(ガ格)標示が10.2%であり、この事例でも、与格成分の実現によって対象NPの主格(ガ格)の割合は相対的に低下したことがわかる。

次いで、4つ目の事例として調査したのが、「結果が/を報告したい」であり、述語動詞の語幹が漢語の場合である。田村(1969)や久野(1973)で指摘されているとおり、漢語動詞のタイ構文では、対象NPが主格(ガ格)で標示されることは少ないが、次の[表5]のような結果を得た。

		対象NPの標示	
		ガ格	ヲ格
与格成分	なし	8例	720例
	実現	0例	42例

[表5]

この表が示すように、与格成分が実現しないときには、対象NPを主格(ガ格)で標示した「結果が報告したい」が8例だけあったが、与格成分が実現すると、主格(ガ格)の例は皆無になった。割合でいうと、1.1%から0%に減ったことになる。

このように、事例の数は少ないが、動詞が和語であっても漢語であっても、タイ構文では、与格成分の共起が主格(ガ格)標示を抑えることがわかる。あらためて、与格成分の有無と主格(ガ格)標示の割合を一覧すると、次の通りである。

「名前を/がつけたい」でガ格標示の出現率

与格成分なし	与格成分あり
11.8%	5.7%

「メールを/が送りたい」でガ格標示の出現率

与格成分なし	与格成分あり
19.2%	14.1%

「意見を/が聞きたい」でガ格標示の出現率

与格成分なし	与格成分あり
48.5%	10.2%

「結果をが報告したい」でガ格標示の出現率

与格成分なし	与格成分あり
1.1%	0%

前述のように、主格(ガ格)での標示には条件が課せられており、そもそも割合が低いことが知られていたが、いずれのケースも、与格成分が共起することで、主格(ガ格)標示の割合が低下しており、その分、対格(ヲ格)標示の割合が高くなっていることが分かる。ここから、与格成分の共起が主格(ガ格)標示を阻害するという傾向が確認されるものと思われる。

以上、第4節では、前節で提示した仮説について数量的に検討を加え、仮説を支持する傾向が見られることを確認した。

5. 終わりに

本稿では、主観表現における対象NPの格標示について、先行研究で取り上げられた諸要因を振り返った上で、与格成分の共起という形式的な要因が主格(ガ格)標示を阻害する傾向を例証した。先行研究で指摘されていた動詞や名詞の語彙的性質あるいは他動性といった意味的な要因を精査する際に、本稿で取り上げた<形式的要因>は、方法論的に注意しなければならないことは明らかであろう。用例の検討から、動詞や名詞の語彙的性質あるいは他動性といった意味的な要因よりも、与格成分の共起という形式的な要因の方が格交替に対する影響が大きいことさえ予想されるが、この点に関する確定的な結論は更なる調査にゆだねたい。

注

- [1] 外来語は、和語より主格(ガ格)標示の割合が低いことは間違いないものの、漢語との比較については、現在調査中である。
- [2] 【カ】に関連して、文レベルの複合性について簡単に触れておきたい。水野(1995)は、複文との関係について、独立した単文に比して従属性の高い埋め込み文の中では主格(ガ格)標示の容認度が低くなることを指摘している。本稿では、紙幅の都合上、具体的な検討を加えることはできないが、同様のことが可能文にも言えることは田村(1992)でも指摘されている。
- [3] 述語レベルの他動性については、Tsunoda(1985)や角田(1991)を参照されたい。
- [4] 10の条件に対する日本語訳は、角田(2005)に依った。
- [5] 水野(1991)も、与格成分が共起すると対格(ヲ格)標示の割合が高くなることを指摘しているが、文法論としては、与格成分の共起によって主格(ガ格)標示

の文法性(容認度)が低下することを例証すべきであり、対格(ヲ格)標示の割合が高くなる傾向は、そうした例証をサポートする間接的な傍証でしかない。なお、本稿でも、第4節において、与格成分の共起によって対格(ヲ格)標示の割合が高くなる傾向を調査するが、(i)第3節での理論的な検討を踏まえていることと、(ii)調査対象の数量的な規模が大ききこと、の2点において、水野(1991)と異なる価値を持つ。

- [6] 以下、すべての調査において、与格成分を意味的に[相手]を表すものに限定するため、副詞句に相当するもの(「すぐに」等)や形容動詞(「簡単に」等)の類は、除外してある。

参考文献

- 井上和子 1976 『変形文法と日本語[上]』大修館書店。
- 庵 功雄 1995a 「ガ～シタイとヲ～シタイ——格標示のゆれに関する一考察——」『日本語教育』第86号, pp.52-64。
- 庵 功雄 1995b 「ガ～シタイとヲ～シタイ——直接目的語の格標示のゆれ——」『日本語類義表現の文法[上]』(くろしお出版), pp.53-61。
- 生田裕子 1996 「願望表現における『を/が』の交替について」『人文科学研究』第25号(名古屋大学大学院文学研究科・人文科学研究編集委員会), pp.39-72。
- 大江三郎 1973 「願望のタイの前でのヲとガの交替」『文学研究』(九州大学)第70輯, pp.1-11。
- 柴谷方良 1978 『日本語の分析』大修館書店。
- 田村すゞ子 1969 「日本語の他動詞の希望形・可能形と助詞」『早稲田大学語学教育研究所紀要』第8号, pp.16-33。
- 田村泰男 1992 「『～が～できる』と『～を～できる』について」『広島大学留学生センター紀要』第3号, pp.13-20。
- 角田太作 1991 『世界の言語と日本語』くろしお出版。
- 角田太作 2005 「他動性の研究の歴史と今後の期待」『言語』第34巻・第8号(2005年8月号), pp.51-57。
- 時枝誠記 1950 『日本文法 口語篇』岩波全書。
- 水野由美 1991 「希望の表現『たい』について——『が』と『を』の問題——」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』第37巻(第2部), pp.474-479。
- 水野由美 1995 「日本語の希望文に関する一考察——『が』と『を』の問題——」吉川守教授御退官記念論文集編集委員会(編)

『吉川守教授御退官記念・言語学論文集』 溪水社, pp.322-334.

森田良行 1988 『日本語の類意表現』 創拓社.

山内博之 1997 「タイ構文におけるガとヲの選択について」『岡山大学文学部紀要』 第27号, pp.155-166.

山本幸子・武藤真理子

1996 「希望表現に用いられる助詞『ガ/ヲ』——使用の実態と分析および指導への提言——」『拓殖大学日本語紀要』 第6号, pp.177-194.

Hopper, P.J. and S.A. Thompson

1980 "Transitivity in grammar and discourse," *Language*, Vol.56, pp.251-299.

Tsunoda, T. 1985 "Remarks on transitivity," *Journal of Linguistics*, Vol.21. pp.385-396.